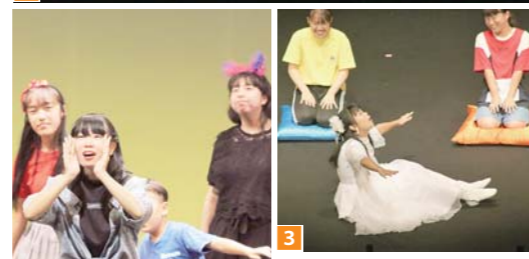


# 育んできた 文化の灯を絶やさず



市内の中小高生が中心になって活動するミュージカル劇団「ドリーム☆キッズ」の第18回公演「感謝祭「ワンダーランド!～不思議の国のその森で～」」(市、市教育委員会、公益財団法人登米文化振興財団主催)は9月13日、登米祝祭劇場で開かれた。キャストを入れ替え2度の上演。団員は精いっぱい演技で観客の胸を熱くした。



1 団員たちは、前に進む大切さを、全身を使った迫真のパフォーマンスで演じた。2 白ウサギを追って不思議な明かりに飛び込むと、そこはワンダーランドだった。3 新しい挑戦だった大喜利、団員は即興でお題に回答。4 住人との出会いを通して、愛の後向きな気持ちに少しずつ変化が表れる。5 人はみんな寂しくして独り。でもその独りが大勢いることを教えられ、周りにいるかけがえのない独りに呼び掛ける。6 住人たちの後押しで、希望を持って夢を探し、勇気を出して挑戦することを決意する。

## 開催できた幸せを忘れず



ドリーム13 チーム  
「兎月愛」を演じた  
**小野寺 絢香さん**  
仙台第三高2年  
(中田町新小路)

愛は激しく落ち込むタイプだけど、自分は前向きな性格。沈んだ気持ちがなかなか表現出来なくて、実際に落ち込んでしまいました。一つ一つのシーンを、自分ならどう思うか、どんな行動をするのか台本にびっしり書き込み、精いっぱい立ち向かっていく愛を演じました。上演の後半は、達成感や上演を終えることの安堵、演技について話し合いを重ねてきたメンバーとの最後の舞台。いろんな思いが込み上げてきて感情が高ぶり、涙をこらえるのが大変でした。

こういう状況でも足を運んでいただいた皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。ミュージカルを見て、少しでも勇気を持ってもらえたらと思います。

## 等身大の自分を出し切る

愛は同じ学年。進路で悩んでいるところも自分と重なり、ありのままの自分で演じました。練習で苦勞したのは、周りに呼び掛けるシーン。感情が乗り切らず、お客さんの心に届く「おーい」ができるまで、何度も何度もステージから呼び掛けました。本番はこれまでの苦勞を思い出しながら自分の全てを出し切りました。悔しいのは練習時間が限られたこと。でも、少ない時間の中で、過去に負けない作品が出来ました。

無観客上演の話もあったので、お客さんが入ると決まってからは、より一層しっかりとした演技をしなければと舞台上に臨みました。皆さんに思いが届いていたらうれしいです。



きのうのSirasu チーム  
「兎月愛」を演じた  
**山内 葵さん**  
登米高2年  
(中田町小島)

の脚本が7月に完成。練習に充てられる時間は例年になく少ない。思うような表現ができずに悩んだ時は、配役が2人いる利点を生かし、互いの演技を気付きにつなげ、何曲ものダンスやせりふを身に付けた。「開催に感謝して、全力で頑張ろう」と心一つにして臨んだ舞台では、堂々とした演技で観客を魅了。2度の上演はあつという間にフィナーレを迎え、客席からの鳴りやまない拍手の中、舞台は幕を閉じた。

18回もの公演を成功させてきたドリーム☆キッズが、登米市の芸術文化を育み、引き継がれてきた文化の灯を、次代へつないでいく。

## Interview



(左) 門間 裕幸さん / (中) 葵さん / (右) 哲子さん  
仙台市若林区

例年よりキャストが少なかったことで、一人一人をしっかり見ることができました。小さい子も上手に踊っていて、みんなの演技が光っていました。大喜利にも楽しませていただきました。

(右) 小野寺 浩行さん / (左) 翔葵くん  
迫町上舟丁



主人公が勇気を出して挑戦を決意するクライマックスシーンは、コロナ禍から立ち直ろうとする我々自身と重なって見えました。ドリームキッズの希望を与えてくれる作品に、毎年励まされています。

## — あらすじ —

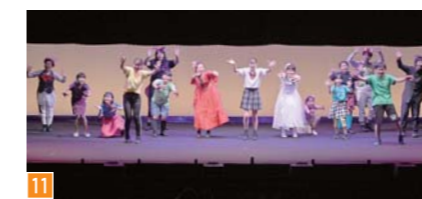
高校2年の兎月愛の心はモヤモヤしていた。進路について、世の中について、そして自分について。「自分は何がしたいのだろう。何ができるのだろう」問いかければ問いかけるほど、答えが見えなくなる。その時、大きな時計を抱えた白ウサギが目の前を走っていった。愛は導かれるようにして走り出す。

愛が迷い込んだワンダーランドでは、白の王と赤の王が待ち構えていた。真の王になるためには、愛の力が必要だ。個性豊かな住人たちとともに自分探しの冒険が始まった。

「ドリーム☆キッズ」は、地域に根差して活動するミュージカル劇団。団員は登米市内の中小高生を中心に構成され、今回の公演では団員26人がいくつもの役を演じた。運営や広報活動、衣装の製作など、ほとんどの役割を保護者や地域のボランティアが担う。関係者は年1回の公演に向けて準備を進めてきたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2月下旬に活動を休止した。再開できたときには6月半ばになっていた。

団員が受け継いできた思いや、年1回の公演に向けて積み重ねてきた努力を知る劇団関係者には、何とか発表の場をつくりたいという強い意志があった。開催にはどのような感染防止策が必要なのか、例年と異なる運営方法を模索。手探りで何度も協議を重ねた。客席や上演時間、キャストを減らし、同じ空間にいる時間や人数を抑えることにした。代わりに、観客、キャストを入れ替え2度上演することとし、劇団初のダブルキャストの公演が決定した。

ミュージカル集団「おむらいすファクトリー」を主宰する渡部三妙子さんオリジナル



7 8 9 団員の保護者が受け付けを担当。検温、手指の消毒など感染防止対策を徹底。10 会場は、客席間の左右1席、前後1列を空け距離を確保。2度の上演に348人が訪れた。11 幕が下りるのに合わせ、かがんで手を振るキャスト

